

Scene 1

『いちらストック隊。投下地点到達。アームロイド投下準備』

重苦しく、薄暗い空間で、男女混じった彼らは一言も発せず、ただ無心に整列していた。どこを見るわけでもなく、ただ体が前を向いているので、そのまま視線が前に並んでいる者の背中を見つめていると言う状態である。

聞こえるのは、強い風の音と数分おきのアナウンスのみで、呼吸やちよつとした足などの動きの音も聞こえない。それも、この空間なかなか大きく揺れているのにも関わらず、まるでその床・空間と一体になったかのように彼らは微動だにしない。

そんな彼らの外見は、とても重々しく異形なものだった。統一して白を基調としたボディースーツのように地肌に吸い付くような服を全身隈無くまとい、同じく白の金属のプレートがある、通常の体躯に合わないような長いガンドレットと同じく長いレギンス着け、背中から臀部にかけていくらかのロケットエンジンノズルが装着された胸部と背面を覆うアーマーを装着している。そして、頭部を覆う白のヘルメットを着けている。目は黒いスモークのシールド、鼻と口はヘルメットに隠れていて、今彼らがどのような

顔をしているのか分からず、況してや胴の厚さを参考に出来ないならば、男女の区別さえもままならない。彼らはそれぞれ人の胴ほどの大きさの白い火器を携えている。

『作戦開始。ハッチ解放。全アームロイドに告ぐ。状況開始。続いてデコイ投下』

警告音と共に、彼らが向いている方向の壁が、上下に収納されていく。それと共に眩い日の光が差し込み、その空間が全て明るみに出ていった。

彼らがいるのは航空機の中だった。そのハッチの外の風景から、その航空機は雲の上のまたその上空を飛んでいる。黄金色の光を帯びた日光は雲を照らし、雲が黄金の飴色に変色しており、同じく日光のせい、空自体の色も青と言うよりは薄い黄色になっている。巨大な生き物のように姿がうねっている目下の巨大な雲のせいで、その下の風景がどうなっているのか確認できない。また、ハッチから左右を覗けば、彼らと載っている同じような航空機がいくつも空に浮いており、同じようにハッチが開いていて、そのハッチには彼らと同じような白い装備を身に付けている集団が垣間見えた

この高度と寒さと低酸素の中、全員が全員全く動揺せずに下を見つめる。そして、満を持して先頭に並んでいた数人が、自らにその体を空中へと投げた。それに続いて、後列の者たちも続いて

ハッチの外へと飛び出していく。彼らはまるで鳥の群れを彷彿とさせるように隊列を組ながら、風に乗る、下へ下へと落下していく。

その大きな装備による風を切る鋭い音が強まることに、彼らはいくつかの箱型の白いデコイと共に加速していく。遠くにあった雲が、いつの間にか眼前へと迫ろうとしていた。

すると、目下の雲の一部が白く光る。その優しい白い光がじわりと光るのを確認すると、彼らの隊列は大きく乱れ、デコイたちは噴出口から出力を出して回避しようとする。そのほんの少し後、光る雲から一筋の柱のような光が一瞬で彼らの方へと伸び、さっきまで彼らがいた場所を貫いて、さらに上空へと勢いを殺さず伸びていく。その際に撒かれたデコイの大半がドライアイスのように気体となって消えていった。その光の柱は数秒後に根本から残像を見せてゆつくりと消えていき、遅れて耳を刺す高音が鳴る。先程光っていた雲の部分はぼっかりと穴が開き、地上が垣間見ることができる。その穴から、更に様々な光の矢のように弾丸などが飛んで来る。

雲の穴の下は鉄の要塞だった。海に面した土地の上に、広く、重厚に建物が立ち並ぶように立地している。一見は高度に発展した街のように見えるが、通りには自走砲が多数や自律パワードスーツの群れがまるで軍事パレードのようで、建物の屋上には対空砲、

各階にも榴弾砲が窓から突き出し、不格好なハンバーガーの様、極め付けは空には様々な種類のドローンがそれぞれ様々な群れを作り、腐敗物に群がるハエの様であり、とても穏やかではない。

それらに対するように、街とは反対方向の平野にかけて、また違った雰囲気の軍隊が並んでいた。自走砲や榴弾砲は街にあるものと比べると、一目見て前時代的であるというのがよく分かる。

また、街の軍隊とは違い、歩兵などが見られ、それぞれがそれなりの装備を携えている。それぞれがまるで花火の火の粉を互いに向けあっているかのように、戦を交えている。だが、それらの光量から察するに、街からの発するものの方が数も質も攻勢であるのが分かる。

街に備えられている対空砲は攻撃の手を止めない。降下する彼らに向かい、光線を、鉛弾を、火薬玉、ロケット弾を浴びせようと、続々とそれぞれを逆さ向きのシャワーのように吐き出していく。それらにより、彼らの辛うじて組んでいた隊列は完全に乱れてしまった。雲を抜け、高度が下がるにつれ、迎撃の密度が上がつていく。今までは難なく避けていた弾幕に、デコイや各々が撒いているフレアに紛れきれなかった彼らのうちの一体が遂に、そしてまた一体と被弾していく。耐える個体もいれば、力尽いたものの、エンジンに被弾し爆発四散するものなど、様々である。それでも尚かいくぐった個体は、次々にドローンに目を付けられてい

く。ドローンは火器を使用したものや火薬を積み込みつつ鋭利な回転式カッターを搭載したものなど多々あり、それぞれが彼らに接近していく。彼らはフレアや火器、EMPを駆使し、対応するが、やはり一体、一体と潰えていく。そんな中、デコイとフレアに紛れて地上に到達した者もいたが、自走砲やパワードスーツがその行く先を次々と阻んでいく。彼らもブースターによる高機動で機敏な動きと手持ちの銃火器で応戦し、同じく敵機を破壊していくが、数に押されていて劣勢を強いられている。

そんな中、彼らの中の一人、比較的体つきの細い個体が、俊敏な動きで猛攻の網を抜け、先の爆撃によって陥没した道路の穴に飛び込んだ。幸運にも、その穴はさらに下へと陥没しており、目いっぱいブースターに任せて、急速下降していく。視界が真っ暗な中、ヘッドギアの暗視を起動し、底へ近づくのを感じると、ブースターを逆噴射し着地した。降下点から少し離れ、銃火器を降下地点の天井に向けて中腰で待機する。

周りをチラリと見回す。暗闇の中、地面に敷いてあるレールや、二列に並ぶアーチ状の空間、天井の配管などから、地下鉄だと推測できる。敵影や人影もなく、無音の空間がそこにはあった。その人物は降下地点を注視しながら、ヘッドギアに内蔵されている無線を開いた。

「ストックのL。所定通り地下へ」

短い微かなその声は女性の声で、冷静かつ淡々とした口調だった。暫くしてヘッドギアから通信が返ってくる。

『こちらオペレーター、了解。三十秒待機後、ソナーを五秒発信せよ。十秒のマップピングの後、行動再開せよ』

彼女は言われた通り、暗闇と沈黙の中、三十秒をそのままの姿勢で待機した。その後、彼女は鉄製の腰に付けたバックパックから、鉛色の直方体の物体を取り出し、その角の一つから突き出ているピンを抜いて地面に置き、五秒ほど静置する。その直方体は微かにぼやけた光を放った後、五秒経つと静かに消える。彼女はそれを躊躇なく踏み潰した。鉄屑となったそれを横目に、彼女は無線に耳を傾ける。

『アームロイド三十三名のソナーマップピングを送る。ストックのLは道なりに5km進め。物資積み替えホームにて収縮爆弾で壁を破壊せよ。規模は70m。その後は自己判断でプリーグナントの破壊に努めよ。以降ジャミングによりこの回線は使えないと思え』

ぶつきらばうに通信が途絶えた。彼女は気にも留めず、立ち上がり、ヘッドギアの内部に写される地図を頼りに警戒しながらブースター移動していく。

敵影は見えず、それらしい気配も一切感じられない。どうやら地上の方の防衛に全てを回しているようで、難なく彼女は指定の

場所へと到着した。

物資積み替えホームと呼ばれる所は、コンベアーとコンテナ用のエレベーターで成り立っている味気のない空間で、人間が立ち入ることが一切考慮されていないのが分かる。また、いくつかの大きな稼働していないアームが至る所から伸びていて、それがまるで生き物の白骨死体か奇妙な形の大きな虫が仰向けになつて倒れているようで、背筋に電気が走るような不気味な光景である。

彼女はそのまま臆せずには彼女はエレベーターの前に進み、バックパックから手の平から少し余るほどの大きさの筒を取り出した。その筒の表面から飛び出ている3つの歯車をそれぞれ調節するように回し、先程のソナーの様なピンを引き抜いてゆつくりと丁寧に地面に置き、今度は素早くそこから離れた。

するとその筒はひとりでに宙に浮く。そして青いレーザーのようなのものが彼女と彼女の装備一式の形を少し超す程度の円形の板を描き、そのまま瞬時に壁に向かって青い円柱が伸びたかと思えば即座に消え、蜃気楼の様に空間が歪む。その後、耳を突き抜ける強烈な超音波が聞こえ、先程青い円柱があつた場所、つまり壁が瞬間的に挟り取られ、トンネルが出来上がった。その切り口はウォーターカッターで切り取つたように綺麗なもので、トンネル内部の前の辺りはケーブルなどが断面からうかがえるが、あまりに綺麗に吹き抜けているので、最初からそう作られていたかのよう

な出来である。コンクリートや鉄骨、金属などが折り重なるように断層が出来上がっているそのトンネルの向こう側からは、明るい人工光が差し込んでいる。

彼女はトンネルの前に立ち、トンネルの向こうを見据えると、ブースターを最大出力でそのトンネルを突き抜けていく。速度がゼロからものの数秒で風を切るようになった。そのままトンネルを駆け抜けようとするが、その向こう側からドローンが顔を覗かせる。それを見据えていたかのように彼女は事前に銃火器を構えていて、スラッグ弾を発射した。被弾したドローンは力なく下へと沈むが、また他のドローンが次々に出現する。だが彼女はスピードを緩めることなく、次から次に弾を発射させる。下へと墜落、または爆発させたりして、出来上がった穴をかいくぐるように、彼女は向こう側へ強引に突き抜けた。

とても広い空間に出た。円柱形の大きな空間で、上にも下にも大きく広がり、半径も一瞬距離感が分からなくなるほどの大きさだ。上は塞がれており、下には金属で出来た巨大な菊の蕾の様建造物が一本大々的に伸びている。その蕾に当たる部分に赤黒い金属の球体が添えられていた。

彼女はその蕾に向かって急速に下降する。その行く手には例のごとく無数のドローンが阻んでいく。それらのドローンは彼女に向かって発砲し始めた。彼女は弾丸の雨を間一髪で避ける。

反撃に発砲しようとするが、構える暇がないほど弾幕が濃くなってゆく。それを多彩な動きで翻弄する彼女だが、あの蕾へは全く近づくことが出来ずにいた。気付けば、彼女はイナゴの群れに紛れ込んだかのようなほどのドローンに包まれている。

そしてついに、一発のドローンから発射された炸裂弾に彼女は被弾する。その際、辛うじて持っていた銃火器で受け止め、直撃は避けたものの、彼女は大きく下に吹き飛ばされ、そして銃火器は完全に真ん中から砕け、使い物になりそうもない。更には今までつけていたヘッドギアが半壊し、吹き飛ばされている間に頭から取れてしまった。空中でヘッドギアに隠れていた長い白い髪が乱れる。

なんとか体勢を立て直すと、髪を揺らしながら蕾へと突き進む。途中で再び阻むドローンに壊れて真つ二つになった銃火器を投げつけて牽制し、その隙に先程炸裂弾を放ったタイプのドローンを彼女は両手に一つずつ掴んだと思いきや、そのドローンを二連で蕾の方へと投げつけた。一つは庇ったドローンに直撃するが、その時にそのドローンに搭載されていた炸裂弾が爆発し、ドローンの群れの網目に完全な穴が出来た。その穴を通して抜けて二個目のドローンは蕾に直撃する。炸裂とその後の黒煙がその蕾の周りに広がるが、黒煙の合間からへこみも何もすも見られなかった。それを確認すると、苦い表情一つ見せずに踵を返すように空中

を彼女は舞う。それを追従するようにドローンの群れが、また挟み打つように群れが荒れる。彼女はさらに柔軟かつ機敏な動きでそれを何とかよける。彼女はおもむろにバックパックからまた先程の円柱形のものを取り出した。彼女はドローンからの攻撃を避けながら一つ目と二つ目の歯車を丁寧に戻し、三つ目の歯車を思いつきり好きなだけ回した。彼女はまた、蕾の方へと突進する。

例に漏れずドローンがその行く先を塞ぐが、今度は逃げようとはせず、両肘を前に、両すねを前に出し、ブースターの出力いっぱいにはドローンの壁にぶつかってゆく。ドローンたちはガンドレットとレギンスに弾かれたりして、ゴリ押されるような形で彼女の侵入を許してしまった。

彼女は蕾にしがみつき、右手に掴んだ先程の筒を、思いっきり蕾のつぺんへと突き立てる。瞬間、人が辛うじて一人おさまる程度の青い円柱が、天へと天井を突き抜けて遥か高く、下へマントルを突き抜けるような勢いで伸びたかと思えば、先程のトンネルのように挟まれる様にその円柱通りに消えた。

途端に、ドローンたちは力が抜けていくようにホバリングが緩まり、次第に落ちていく。まるで無数のハエの詰まった空間に殺虫ガスが撒かれたように、空間いっぱいのだローンは下へ下へと落ちて行つた。そしてその空間いっぱいの人工光は全て消え、光と言えは先程の爆発で出来た天井に開いた穴から差し込む夕陽の

光と彼女の装備のブースターから光る光のみだった。

薄闇の中、彼女は蕾から離れ、爆発によって消えたガンドレットを見る。大きなガンドレットの義手部分は完全に消え去り、あと数センチで本物の指先に到達するところだった。

そして彼女は、すっかりドーナツのように開いた蕾を一瞥し、まるで何かに報告するかのように呟いた。

「プリーグナント破壊。プリーグナント破壊完了」

Scene 2

そこは青白い光が満ちている長い廊下だった。材質は基本的に全て鉛色の金属で、時折金網状の板が地面に埋め込まれている。その下からは青白いぼやけたライトがあり、その空間を照らしている。床、天井、左方の壁はだいたい先程の様な板で構成されているが、右方の壁はガラス張りで、その向こうを見渡すことが出来る。

その向こうには上下左右に広い空間があった。同じく青白い光と、金属の無機質な造りは変わらないが、巨大な空間の壁には、千を優に超す数のマス状に切れ目があった。その空間の地面には、いくつもの重機が並んでいる。

それらを見つめながら、三人の男は廊下を歩いている。三人のうち一人はスーツをまとった気弱そうな壮年に近い白髪の男性。二人は白衣をまとっている若者で、一人は茶髪の困ったような、呆れたような顔をしており、そしてもう一人は悠々とにこやかな表情を浮かべているプラチナブロンドの髪の男性。にこやかな男性が先頭に、次いで呆れ顔の男性が、最後にスーツの男性が歩いている。

にこやかに笑っている男性が口を開いた。
「いや、すごい迫力ですね！ 文献や写真は散々拝見しましたが、

やはり何事も生で見るのは良い！ こんな幻想的なものを毎日拝めるなんて、あなた方が羨ましい限りです！」

それに呼応するように、スーツの男性は「はあ」と返事する。
「確かここで五千人のアームロイドが眠っているんですけど？ いやー、凄まじい数ですね……！ これでまだ三分の一でしたか？ いやー、驚きを通り越して感動を覚えます！」

「あの……正確には三千体です……あと、実際に稼働しているのはここだけです……」

そう、スーツの男性は答えた。笑みを浮かべる男性はそれを聞き振り返り、笑みをニヤリといった笑みに変えた。

「あつれー？ そうでしたっけ？ いやはや、どうやらうる覚えだったみたいです。お恥ずかしい限りで——」

「……あの、マクシーさん？ 本当にアームロイドを引き取るおつもりですか？ 何故そんなことを……？」

と、スーツの男性は唐突に笑みを浮かべる男性を遮った。そして聞いかけられた男性は歩みを止め、それにつられて他二人も足を止めた。

「えつーと、ジレットさんでしたっけ？ 今の質問はどういう意味でしょうか？ アームロイド保護施設の施設長の口から出る言葉とは到底思えないのですが……」

声色も変えず、表情も変えず彼はそう言った。

「……ジムレスです」

「おーっと失礼失礼」

スーツの男性はおどおどしながらも、どこか決心をしたように言う。

「……マクシーさんもご存知でしょう？ 先のブリーグナントとの大戦以降に、アームロイドたちが更生最中に起こした事件の数々、専門家の元でもこれらの惨劇があったというのに、一般人の貴方がどうこうできる問題ではない……いえ、出来る訳がない」それを聞いて、尚も彼は静かに笑う。

「ジムレスさん、それにしてもこの施設は本当に手が込んでいますね」

突然の話題の切り替えに「えっ」とジムレスは口から漏らす。

「殺菌効果のある紫外線を人体に影響が出ないように工夫されたこの青い光、これをブリーグナント大戦以降、二十年間にも渡って一秒たりとも災害が起ころうが停電になろうが切らさないでいる。それにこのガラスの向こうのあの壁のマス目一つ一つにアームロイドがコールドスリープされ続け、更には脳波や脈をずっと測り続けている」

彼は話しながら、体の向きをガラスの向こうへと向ける。そして笑い続ける。

「でも、人間に対する扱いじゃない。本来保護っていうのは、も

っと温かみのある対応と、ある程度の自由な環境を与えなければならぬ。それが、彼らはアームロイド用の大きさに合わせて作られた棺桶に詰められてカプセルホテルみたいに眠っている。これは保護じゃない、格納だ。僕がもし彼らだったら気が狂っている」

彼は体をジムレスに向け、ジムレスと目を合わせた。その時にまるで蛇に睨まれた蛙のようにジムレスはたじろいだ。

「それにジムレスさん、貴方、アームロイド保護施設の施設長の肩書にも関わらず、彼らの事を全く理解していない。一般の人々と何ら変わらない。色眼鏡を使いすぎて本来の見え方を忘れてしまっている。僕の好きじゃない偏見にどっふり浸かってしまっている。貴方はさっき、彼らの数え方を『体』と呼んだ。人間の扱いじゃなく、ただの兵器として見ている。正直ガツカリですよ」それを聞いて、スーツの男性はどう返答すればいいか分からず、黙ってしまい、ただ彼の足元の方を見ている。見かねた茶髪の男性が彼の肩に手を置き、代わりに口を開いた。

「アル、そんなにいいいだろ」

アルと呼ばれた笑みを浮かべる男性はフツツと鼻で笑い、再び前に向き直して歩いていく。またまたそれにつられるようにして他二人も彼についていく。

「先程の質問ですが、勿論引き取りますよ。理由は簡単です。僕

みたいに成功してお金を持て余し、尚且つ今後また活躍の場を手にした者は、何かしらの慈善活動をして周りに宣伝するのです。就職活動もそうでしょうか？ 在学中にボランティア活動をして、自分の看板を飾るんです。僕の場合、そのボランティア活動がアームロイドの更生ですよ。前人未達成のこの偉業を成せば、僕の株も鰻登りつて訳です。あと、アームロイドの一連の事件ですが、勿論知っていますよ。例えばそうですね、地下鉄のアレ、男性のアームロイドが引き取り主と一緒に線路に飛び込んだやつ、無修正動画が動画サイトでありましたけど、凄惨なものでしたねー。人間ってあそこまで無残な死に方が出来るんですねー。いやはや、背筋が凍りましたよ。他には大量殺人を行った件もちらほら。報道規制が出ましたけど、人々の噂によって結局は公に」

丁度そう言い終わるころに、廊下の終わり、重々しい鉄製の扉にたどり着いた。床から壁、天井へと広がる六角形のハッチの様な扉。見たところこれを開けるようなコンソールはないが、彼らの接近を感知すると重々しくゆつくりと横へスライドするように開く。

「さあて！ 感動のご対面の時間だ！」

両手を左右に大きく広げ、無駄に芝居がかった様子でアルは言っているがその扉を抜ける。

そこはやはり同じような雰囲気、青い立方体の空間で、大きさ

は特別大きくもなく小さくない5m立方ほどの広さである。この空間は廊下よりもマス状に区切られた壁、アームロイドたちが眠っている壁に対して飛び出しているような形である。そして同じく、あの壁に向かってガラスが、右方の壁の代わりにはめられている。その部屋の中央、まるでモノリスの様な直方体の黒い鉛の物体がそこにあった。その上部にはそれが開閉できるような切れ込みが見られる。その物体は冷気を放っていて、近づくといんやりとした空気を感じ、その証拠に表面に水滴がついている。そしてその物体のアルたちから見て向こう側に一人の白衣を着た中年の男性がいる。片手にパッドデバイスを持ち、彼は訝し気に彼ら、主にアルを見つめていた。

その物体を見てアルは両手を下す。さながらクリスマスプレゼントを開ける子供の輝かしい目をしながらその物体に近づく。

「早く開けてください！ もう待ちきれない！」

「あの……メェマクシー、本当によろしいのですか？」

と、物体の隣の中年科学者は言う。それを聞くと、アルは少し深いような顔をして返す。

「しつこいなあ……。とつくに上からの許可は取っていますよ？」

反対、これすなわち命令違反ですよ？」

中年研究員はそれに続ける。

「彼らの精神状態は異常です。もし万が一のことがあれば……よ

りによってストック隊L番……しかもアルビノ個体です」

「もー、知っていますよ。改造の際の投薬や精神安定・抑制剤によって精神が不安定になり、重なる戦闘によってPTSDの症状が見られる。それも多方面にわたってね。彼らにとって全てが鍵刺激になりうる。ストック隊のL番、彼女は一応軍の規約によって公には明かされていないが、エラーにより人類に牙をむいた人工知能プリングナントを仕留めた英雄。そして彼女は戦時中の精神剤投与により髪を脱色。一般にアームロイドの後天的アルビノ個体は精神的に脆く、短命です。ね？ちゃんと把握してまずですよ？」

「その危険性を知ってどうしてそこまで——」

「それは勿論、彼女の更生成功の確証があるからです！PTSDは現代医療技術ならば治療はそう難しくはありません。ついでに言えば私が彼女を選んだ理由は、偶然です。何の気なしに選んだらまたま彼女になり、それで調べてみたらまたま彼女が英雄だった。そんな彼女がアルビノ個体！いや、精神が弱いわけがない！あと、アルビノと聞いて、ちよつと心が躍りました！ほら、僕とペアルックみたいでテンション上がるじゃないですか！はい、全部答えましたよ！早く開けてください！」

「……コールドスリープ解除します。ですが、すぐには目覚めません。数日は必要になります。あと、目覚めても極度の対人恐怖

症で、しばらくはこの施設の中で——」

「だーかーら！全部知ってるって！はやく！」

そうアルが言うと、困った表情で研究員はパットデバイスに入力していく。すると、その目の前の物質から空気が抜けるような音が鳴り、静かにその物体のまるでカメラのシャッターのように多方面から閉じていた鋼鉄のプレートが開いていく。

そこに現れたのは、若い女性。アルビノの長い髪、痩せ細り、少し張りの見られない肌、白いローブの様な服を一枚着て、その物体の中に眠っている。まるで死装束、そして死体の様な彼女だが、先程の研究員にパットデバイスの中のバイタリティサインは確かに生きていることを示していた。

全員が息を飲んだ。ある者は不安げに、ある者は忌々しいと言わんばかりの目で、ある者は嬉々として、様々な心持のまま、彼女を見ている。

全員が静観する中、彼女の手がピクリと動いた。アル以外が驚きの声を短く上げる。そして、瞼の筋肉がもぞりと動いたかと思うと、その瞼はまた徐々に開いていった。

全員が言葉を失う中、その中でアルが率先して彼女の元へ近づいた。

「おお……！凄……！素晴らしい……！見ろ！どこが精神の脆弱性だ！コールドスリープからもう目が覚めた！やあ君。

元気かい？ 僕の名前は――」

と言いかけて、彼は口をつぐんだ。彼は彼女の口の動きに気が付く。彼女の口は微動していた。寒さで震えているのかと思ったが、ふと瞳を見ると、瞳孔が開いていて、小刻みに震えている。そして彼は優しい口調でこう言った。

「やあ、怯えさせて済まない。僕はアルマンド・マクシー。みんなからはアリーとかアルとか呼ばれている。この指を見てくれるかい？」

と言い、右手の人差し指を立てる。その指を彼女が見つめるのを確認すると、彼はその指を不規則に動かした。しばらくそれを続けると、彼女の意識は切れかけた電球のように朦朧と弱々しく、消えそうで消えないという波を繰り返し、遂にはふと流れた風に掻き消される火のように、意識が落ちた。

Scene 3

彼女は、あのモノリスの様な棺桶で覚醒したのと同じように、ベッドの上で目が覚めた。そこは太陽がこれ見よがしに部屋中に差し込むようなガラス張りの広い建物だった。こげ茶のフローリングの床の上にはいくつもの、形も様々な植木鉢やと、その上に伸びる色鮮やかで多様な花々がその部屋を彩っている。それだけでなく、つまれたレンガに作られた花壇や天井からつりさげられており、まるで植物園の様だ。そんな部屋の中央に彼女の寝ているベッドあり、そのベッドからありとあらゆる方向を見回しても、カラフルだが嫌気のしない配色が意図された花々と草木と、その建物のガラスの向こうにある青空の風景を楽しむことが出来る。彼女は今自分がどういう状況にあるかを考えるため、記憶を辿っていった。プリーグナントを破壊して、その後回収された後、コールドスリープを強いられた。そこから記憶が飛び、一度だけ意識を取り戻したことを思い出す。その記憶の中の彼女の目の前にいたのは、煌くような色の髪をした白衣の男性だった。彼が彼女に向かって優しく語り掛けたのを彼女は覚えていた。

「やあ、おはよう」

彼女の意識に呼応したように優しい声色の男性の声がした。はつと彼女はその声の方向を見た。その方向は仰向けに寝ている彼

女から見て左上で、視点を動かさねばギリギリ見えないベッドの傍らにその声の主がいた。その声は記憶の中の白衣の男性と同じ声で、そして見た目も完全に記憶と同じものであると彼女は分かった。

彼は彼女が彼を視界にとらえたのを確認すると、会話がしやすいようにベッドの左側の真ん中の辺りへと移動した。

「さて、話せるかな？ 何か喋ってみてくれないか？ そうだな…君の名前を覚えてくれるかい？」

一瞬、口をもごもごと動かす彼女だが、彼女は素直に口を開いた。

「……ストック隊の「番です」

「よし、声は出るか。呂律も回っている。僕の事は覚えてるかい？」

「はい、アルマンドさんですよ」

それを聞いたアルは嬉しそうにうなずいた。

「結構。じゃあちよつと失礼するよ」

と言い、彼は右手を彼の白衣に入れ、そこから何やら端末機器を取り出し、それに二、三の操作する。すると、彼女の寝ているベッドの枕から腰に掛けての辺りが、ゆっくりと隆起していった。それに伴って、彼女の体の上半身が起き上り、丁度椅子に腰かけるほどの角度になると隆起が止まった。

「じゃあ、体を動かしてみようか。手の指は動くかい？ もし可能なら両腕を上下に動かしながら握ったり開いたりしてみてくれるかい？」

彼女は言われるまま、手を胸の前に伸ばして手を閉じて開いてを繰り返した。

「オッケー、じゃあ、念の為に聞いておくけど、上体を起こしたり足を動かしたり出来るかい？」

先程と同じように彼女はそれを実行し、上半身をわずかに動かした。しかし、突然彼女は異変を感じ、顔をしかめた。

「……上体は動かすのが困難です。下半身は感覚がありません」
しかめた顔の彼女の顔と反応を見ても穏やかな表情のままアルは「失礼」と言いながらベッドの掛け布団を少しめくり、彼女の左足首を軽く触る。

「触られている感触はあるかい？」

彼女はその髪を揺らすように静かに首を横に振る。彼は足首から手を離し、布団をかぶせる。

「うん、説明しよう」

彼はベッドの時に握っていたものと同じ端末を軽く数回操作すると、彼女の目の前、ベッドの上の空間に、ホログラムのような透過性のあるディスプレイが出現した。彼女はそれを見ると、表情を消す。

そのディスプレイ上の右には白色の髪が結われた長い髪をもつ華奢な女性の頭部から臀部近くの背部の裸の写真、左にはそのレントゲン写真が映し出されていた。その女性の背部は、背骨や肩甲骨が浮き彫りになるほどやせ細っており、髪の毛の生え際から尾てい骨の辺りまで、その浮き彫りになった骨々の各溝に親指の爪ほどの黒く丸い点があった。その点をよく見ると、黒い輪で縁取られていて、その輪は撮影時の照明などで黒光りしている。更によく見ると、その輪の内部は空洞であった。そしてレントゲンだが、その各々の穴にあたる部分から、脊髄に向かって管がいくつも通っており、レントゲン特有の白い影として表されている。

「さて、分かると思うが、これは君の背中の写真だ。……先に言うておくが、デリカシーのない事したとか、野暮なことは言わないでくれると助かる」

苦笑いをするアルだが、無表情な顔で彼女はその二つの写真を見つめる。アルは苦笑いを先程と同じような柔らかな表情に変えて続ける。

「この背中穴だが、これについて分かることはあるかい？」

彼女は無表情にそれに返す。

「はい、私とアクティブ・ジェットノズル・ユニットを繋ぐプラグの穴です。意思と操作動作の遅れの差を取り除くため、脊髄から出る電気信号を直接機械に取り入れるようにされています」

「その通り。これによって君たちのあの高機動が保障されていて、ドローンにも勝る動きが出来る。これが一昨日までの君の姿だ」

という、アルの含みのある言い方に、彼女は鮎をわずかに傾ける。そして彼は、その端末に人差し指を優しくつき立てた。すると、ディスプレイの内容が変わる。右に背部の裸体の写真、左にレントゲンの写真が同じように映し出された。その二つの画像を見て、彼女は小さく息を呑んだ。

その二つの写真は体つきと髪から、紛れもなく彼女自身のものだとは分かるが、先程の写真のような、背骨に沿うプラグの穴が、まるでそのようなものが最初からなかったかのように、綺麗な肌が素知らぬ顔でそこに張り付いている。レントゲンを見ても、いくつもあったあの管も、一つ残らず影を消していた。

彼女は咄嗟に動くその両腕を、頭の後ろに回すように自身の背中へと回す。関節が硬くなっており、かろうじて背骨に届いたが、そこには無機質な感触は一切なかった。その手を首の裏へと回すが、同じように妙な感触は返ってこない。

「神経接続用人口脊髄を取り除いて、普通の人口脊髄と取り換えさせてもらったよ。今はまだ生体電流の解析の最中だから、下半身は不随状態。まあ今夜中にはその解析も終わるだろうし、リハビリしていればそのうち自由に動くさ。それと術部癒着剤が予想以上に相性良かったみたいだね。もう他の皮膚と比べても、若干

少し赤みが残る程度かな。まあ明日には赤みが消えてると思うよ」彼の説明の間、ひとしきりそのなくなっていたいくつもの穴を探ろうとするが、やはり見つからず、腕を元に戻してベッドにもたれ込んだ。そして彼女はアルを見て口を開く。

「私の時代にはここまでの技術はありませんでした。私はどれほど眠っていたのでしょうか？」

「自分がコールドスリープしていた記憶はあるんだね。ざっと十七年かな。ちなみに君が収容施設で目覚めてから、今で四日目になる。体の健康状態は日に日に良くなっているよ。肉体的には勿論、ドラッグデトックスは既に済ませてある。以前のように薬物絡みでのトラブルは今後無くなるだろう。他に何か質問はあるかい？」

そう言うと、彼女は遠慮なく問をぶつける。

「アルマンドさんのこの一連の私に対するケア行為の目的は何でしょうか？ アルマンドさんのメリットは一体——」

「そう言う目的やメリットがない行動はないっていう考えは悪いものだ」

とアルは遮る。にこやかなまま、彼は左手を彼女の頭の上に乗せる。

「強いて言えば、全アームロイドの社会復帰だ。正直メリットはどうでもいい。達成した時のその恩恵は確かにあるかもだろうけ

ど、何かが貰えるなどと言う確証なんてないさ。それと、僕の事はアルと呼んでくれ。アルマンドは長いし、言葉の響きのにも何だかあまり好きじゃない。敬語も慣れたら止めて欲しい。分かったかい？」

暖かいその手の熱を頭から感じた彼女は、呟くように

「分かりました」

そう口にする。アルはそれを聞き入れると、頭から手を放してその手を彼の顎に当てて考えるような素振りを見せた。

「さて、リハビリとか就職に向けての訓練とか色々今後の話があるんだが、その前にまず君の名前を決めようか。ストック隊のL番は名前としてあまりにも可愛げがない。何かいい名前は――」

「アルー!! ちょっといいかい!!」

そう彼が話している最中、唐突に他の男性の声がどこからか響いた。アルはわかりやすいため息をついた。

「空気を読まない無粋な奴め……。ベリー!! 病室に来てくれ!!」
アルは天井に向かって大声を上げる。そしてキョトンとしている彼女に向き直って言う。

「今から僕の助手を紹介しよう。ちょっと待ってくれるかい？」
彼女はコクリと頷いた。ものの二十秒ほどで、声の主は現れた。その部屋のガラス張りの壁の一部に、大きな黒い長方形が縦に現

れる。その長方形は、よく見ると黒いドアノブが突起のように突き出ており、そのドアノブがひねられて、その長方形が開き戸のように開いた。そこから出てきた男性は、茶髪の白衣を着ていて、右手にはクリアファイルを携えていた。

彼は「うおつ」と小さく声を出してその部屋を見回した。

「眩しいなおい……。もう夜なんだが、なんでインテリアホロをデイスにしているんだお前……」

「目覚めるならやつぱり月明かりより太陽の光を浴びた方がいいだろ? あ、でも夕焼けバージョンもきれいだぞ? ちょっと見てみるか?」

「いや、いい。ちなみに今日は月が綺麗らしいんだが、見せていいのか?」

その男性、先程ベリーと呼ばれていた彼がそう言う、アルは何か閃いたように、硬直する。

「そうだ!! 月だ!! 丁度スペルもLから始まるし!!」

喜ばし気にアルがそう言う、彼は自分の膝を折ってしゃがみ、彼女に向き直って彼女の両手を取った。

「今日から君はルナ、と名乗るといい。ファミリーネームは僕のマクシーをしよう!! 分かったかい?」

彼女は頷いた。アルは何も言わず笑顔を見せた。そして手を放し、今度はベリーと呼ばれた男の腕をつかみ、ルナの前にずいっ

と引き寄せた。アルはすかさず、

「彼は僕の助手、ベリック・トートマン。ベリーって呼んでやってくれ。何か困ったことがあれば僕か彼に聞いて欲しい」

ルナの表情が緊張で強張る。ベリーはその彼女の表情を見て困ったような表情を浮かべたが、ベリーはアルに続ける。

「ベリック・トートマンだ。こいつと一緒に主には引力とか重力だが、それらに関係のある分野の研究をしている。……まあ最近はまだ関係のないことばかりやっているがな。何かあったら言ってくれ」

彼女は軽く会釈をする。そこでアルが思い出したように彼女へと説明する。

「そうそう！ 名前しか名乗ってなかったけど、僕たちは引力の研究をしているんだよ。すっごい簡単に説明すると、大きな物質はそれより小さな物質に対して引力を発生させるって言う性質を用いて、反重力装置を作るのを目標にしている。大きな物質の上に延々と大きな物質を重ねていけば、一番下の物質は重力を逆らっていくっていう理論だよ。最終的には空中都市を作るのを夢見ているってとかな。目下は見にブラックホールを作る、みたいな」

それを受けてルナは無言で頷いた。それを確認してベリーは突然、アルの腕をつかんでルナに向かっていう。

「すまん、ちょっとこいつを借りるぞ」

そう言って、少し驚いた表情のアルを扉の方へと連れて行った。

「あ、ルナ、今日はもう遅いからまた明日話そう！ 明日からはリハビリが始まるぞ！ 何かあったらその枕元にあるコールボタンを押してくれ！ おやすみー！ ちょっとベリー痛い痛い痛い……」

悲鳴を上げるアルをよそに、ベリーは彼をその部屋から引き釣り出した。部屋から出るとそこは廊下で、白い壁にこげ茶のフロアリングという洋風な雰囲気かじみ出ている。ベリーはそこで手にもったファイルをアルに突き出した。

「あの子の引取りについての署名文書だ。早く書かないと施設に逆戻りだぞ」

「了解した。いつまでに仕上げいい？」

「明後日だ」

「明後日か……まあこれ一枚だけなら全然余裕だな……」

「いや、その紙に書いてあるのは署名文書のダウンロードリンク集だ。七十件くらいある」

アルの顔が凍る。

「え……何でもっと早く言ってくれなかったのか……」

「一応何度も言ったけどな」

呆れた顔を見せながらベリーは「そんな事よりも」と言い、話を区切った。アルは気にせず、その受け取ったファイルを訝しげ

にまじまじと見つめる。

「あの子の俺に向ける警戒とかなんとかならんのか？ 今後リハビリとかやっていくのに支障とか出るだろあれじゃ。ほら、お前が前に施設であの子にかけた暗示とか使つてな」

アルはファイルから紙を取り出してリンク集を睨んで言う。

「僕はそこまで万能じゃないよ。あれは彼女の精神がかなり衰弱していたから通じたようなものだし。その結果、さっきの一連の会話のほんの一瞬も彼女は僕に警戒しなかったから成功していたみたいだね。まあ、この前のドラッグデトックスで体内に蓄積されていた薬とかは無くなったし、脊髄移植の時に脳もいじって薬物の味を忘れさせたわけだし、そういう訳で彼女は普通の引っ込み思案の女性と変わらなくなった訳だし、あとはコミュニケーションの練習を積みれば社会復帰をしたも同然さ」

「……引っ込み思案ねえ。どっちゃかって言う機械的な気がしたかな」

「それを言うなら、あの子つてのもおかしいね。出生年的にはルナの方が一回りも年上だけだね」

するとベリーは腕を組んで偉そうに返す。

「出生年的にはな。だが、実際俺らのほうが人生経験は長い」

アルはそれを鼻で笑うと、紙をファイルに戻して言う。

「さて、一度デスクにこれを置いてくるか。……この文書、この

前作った『あれ』使っちゃ駄目？」

「何でもかんでも機械に頼るなよ……話が変わるが——」

そう言い、ベリーは廊下を踏み出していく。アルもそれに続き、二人は会話をしながらその廊下を進んで行く。

「さて、早速今日からリハビリを行う訳だが——」

ルナが目覚めた翌日の朝、アルは元気良く言つてそこで言葉を切った。そこから繋ぐようにベリーが言う。

「もう立っちゃってるな」

二人はルナを見る。彼女はキョトンとした顔でベッドの傍らで彼女の華奢な二本の足で立っていた。腕で何かを支えている様子もなければ、無理に立っていて足を強張らせている様子もなかった。要するに、まるで健康な人間が何気なく立っているような感じで彼女はそこに立っていた。

アルは端末を開いて、空中にディスプレイを出現させる。そこに映るのは、簡単な人間の模式図のようなもので、首の辺りから臀部にかけて、淡い青の光が点滅している。

「……いや、人工脊髄がアクティブなのは分かるけど……」

いくら人工脊髄が神経との親和性が高いからと言って、そして

神経を断線した時間がほんの僅かだからと言って、断線した神経がそんなにも早く人工脊髄からの信号を受け入れるものなのかと彼は心の中で呟いた。もしかすると兵役時代の薬物の影響なのかと、彼は僅かにうろたえた。そう言えば、コールドスリープからの解凍直後、すぐさま彼女は覚醒した。何か因果があるのかもしれないと、アルは彼女を見つめる。

「……歩けるかい？」

彼女は首を小さく縦に振った。ひたひたと裸足でフローリングの床へと踏み出す。彼女はその場から三回足を運び、ターンをしてその場に戻った。全く足取りは健常そのもので、とても前日は下半身が不随だったとは思えないほどである。言葉を失うベリーをよそに、アルは「ふむ」と一息をついてから言う。

「よし、じゃあ走れるかな。走ってみようか」

と言い、端末をいくらか操作した。彼が端末から手を離れた直後、彼女の寝ていたベッドは枕の方向へとひとりで移動していく。花壇の方に差し掛かり、激突しそうになったが、ベッドはその花壇をすり抜けて、壁の方へと進み、壁をすり抜けて姿を消した。

これら一連の動作と共に、部屋のインテリアホロが歪む。そして瞬時に、部屋の内装が変わった。花壇や咲き乱れていた花々、どこまでも突き抜けるような青空と透明度の高いガラスが、全て

ノイズが走るように歪むと、その部屋の内装はオフィス街のビルの一 corner のジムをモチーフにした部屋に変わっていた。バレエ教室の様な壁一面の大きな鏡、そこ鏡から突き出ている手すり、天井から部屋を照らす照明、それに照らされて反射する明るい茶色のフローリング床、そして何より印象的なのが、ひとつの壁が一面ガラス張りになっており、そこから外を覗くと、目の前にはビル群や車の列といった都会の喧騒を見下ろせる。たった数秒で安らぎの空間から体をのびのびと動かせるような広い空間へと早変わりした。

「こっちの方がやる気であるしそれっぽいでしょ？ 周囲が何かに取り組んでいる環境下に身を置くと、自然と自分も何かをやらなければならぬという義務感が生まれるんだってさ。日本人にはこれが顕著らしいよ。それにあやかっただけじゃあ僕らもちよと体を動かしてみよう。これが終わったら朝食だ！」

そこでベリーは口をはさんだ。

「いやいや……いくらなんでも激しい動きはまだ早いんじゃないか？ 今はストレッチ運動から始めた方が……」

「確かに。ルナ、どうだ？ 厳しそうか？」

聞かれた彼女はふるふると首を振った。

「よし、じゃあもし無理だと思えばそこで止めてくれ。君の自己判断に任せよう。いいか、最初は歩いてから早歩き。そこから

軽いジョギングしてみてくれ」

彼女はまたこくりと小さくうなずくと、その広い空間を動き始める。彼女はひたひたと音を立てて円を描いてゆつくり歩く。そこから早歩きになった。難なく軽快にあるく彼女は、続いてジョギングを始める。円を意識して動いていたが、その広い空間を有意義に活用すべく部屋の中を直線状に走り始めた。端に来ると華麗に切り返しをしてまた走ってきた道を颯爽とジョギングしていく。リズムの良い息遣いと足音がそこに鳴り響く。二往復程終えた後、束ねた白く長い髪を躍らせながら走る彼女を見て、アルは嬉しそうに鼻から息を出すと、比較的大きな声で言った。

「はいダッシュュ！」

途端、彼女は俊敏に駆け抜ける。それはさながら一瞬強い風が吹き抜けるようだった。彼女の走りは実に速く、綺麗なフォームで進んでいく。

「はや……むしろ俺らより速くねえかこれ……」

ベリーは啞然として言った。反してアルはにこりと笑う。一通り走ると、彼女は足を止めて若干の息の荒さと共にも解いた場所へと歩いていく。そんな彼女にあるは語り掛けた。

「身体的なりハビリはあまり必要ないようだね。あとはコミュニケーションってところか。どうやらベリーへの緊張はまだ解けてないだろうし」

分かりやすくベリーとルナの顔は苦虫を潰したように表情を変えろ。

「まあ、逆に言えばそれをクリアすれば他に特に何も問題ないって事だし、深く気負いする必要はないよ。ちよつとした現代社会の授業もあるが、君の就職先とか偽の経歴とかは全て決まっているから、取り組む課題は本当にそれだけさ」

「逆にそれプレッシャー与えてね？」

Scene:4

アルはまじまじとルナの全身を見た。ルナの服装は黒のスカートタイプのスーツを着て、アルの顔色を伺っている。

「やっぱりスーツは見栄えが変わるねえ……。いい意味で際立つって感じがする」

何やら感慨深くなっているアルに対してベリーは言った。

「……ていうか、いつの間にスーツなんてものを用意したんだよお前。あれから外出してないだろ」

「ああ、デリバリーだよ。サイズは最初の検診の時に測ってあったから、その翌日には受注したよ。やっぱりスーツは首周りとか袖の長さとか合わせるべきだし、オーダーメイドしなきゃね。断然見た目が変わるよ」

「お前、そんなこだわりあったっけか。ちなみに外に出るときはどんなの買ってるんだよ」

「五百ドルくらいのかな」

「普通に安物じゃねえか」

そこでアルは「そんなことよりも」と区切りをつけてルナに向かって言う。

「リハビリ終了おめでとう！ ついに明日から念願の就職だ！ 予定では一ヶ月のリハビリをたったの二週間で終わらせるとは非常

にグッジョブだ！ この部屋とおおさらばだ！ 後で君の部屋を与えよう！ 三階だから景色が結構いいぞう！ そして、君の偽の経歴とかそういう面倒なのはこっちで辻褄を合わせているから気にしなくていい！ さて、明日からの通勤だが――」

「あの、ひとつ質問よろしいでしょうか？」

唐突にルナは遮って言った。「ん？」とアルは首をかしげる。

「私は一体何の仕事をすればよいのですか」

「おいアル、言ってるねえのかお前」

「言ってるなかったっけー。ただの庶務だよ。仕事はそこその量。

求められる技量とかもそんなに大したことないさ。肩の力を抜いてちよつとした社会勉強だと考えればいい。その会社に一カ月ほど馴染めば、僕も報告書を監査委員会に提出出来て、世界初のアームロイド更生完了って訳さ。まあ、こうして何のトラブルを起こしてない時点で、もう更生なんてだいたい終わったも同然なんだけれどもね。監査委員会の皆様はどうも実質的な結果をお望みのようだ。そして、君の更生は後に更生すべき他のみんなの轍になるのは間違いない。もしその会社が馴染まなかったならば、他の会社で励めばいいさ。なんせ期限はまだまだある」

彼はルナの肩を鼓舞するように叩く。ルナはそれに軽くうなずいた。そして彼は彼女の両肩を掴んで、軽く部屋のドアの方へと押し出しながら言う。

「さて！今日はパツと外食にでも行こう！君に似合うドレスを用意したから、そのスーツから着替えておいで！ささっ！」

彼女は素直に頷き、素直にアルに押し出されてドアの方へと向かい、ドアを開いて部屋から退出していった。

「さて、ベリーくん。ちよつと作戦会議だ」

ベリーは眉を曲げて、「ん、なんだ？」とアルを横目に言う。

「やたらと覚醒からの時間が早かったり、早く立ち上がることも出来たり、学習能力概要に速かったり等々のルナの特種体質についてだが、ようやく原因が分かったよ」

穏やかに言うアルに、ベリーは顔を向けて問いかける。

「一応聞いておくが、偶然じゃないんだな？」

アルは首を横に振る。そして同じくベリーに顔を向けて言った。

「人間の神経の多さは知っているかい？」

突然のそのような問いに、ベリーは少々面食らったようだが、静かに首を横に振る。

「いや、知らねえ。専門外だ」

その返しに、アルは鼻で笑って口を開く。

「便利な言葉だなあ。その専門外って言葉は。科学者にもってこいだな。今度から僕も使おう」

「うるせえな……。お前みたいに他分野をいくつもいくつもかじりすぎてるやつの方がおかしいんだよ。で、神経がなんだって？」

ベリーが話の軌道を修正すると、アルは嬉しそうに言う。

「普通の人間は全ての神経の長さを足すと72kmもの長さになるらしい。ところが、ルナはざっとその数の二倍はあるほど緻密に神経が張り巡らされている。言わなくても分かると思うけれど、単純に数が多いってことは、それだけ体の電気信号を受け取る確率が上がるって事さ。それだけじゃない。彼女の神経の伝達速度も普通の人間とは格が違う。彼女の髄鞘神経を取り出して、パソコンのケーブルと取り換えたいくらいだよ」

そこでベリーは息を飲んでアルに問いを投げる。

「……それってアームロイド特有のものなのか？」

アルは「いや」と言ってそれを否定した。

「覚えているかい？彼女がコールドスリープから目を覚ましたのは、解凍されたまさに直後だった。だが、普通の人間や他のアームロイドは少なくとも数日、具体的に言うで一週間はかかるんだ。今まで脳からの信号は殆どシャットアウトされてた上に、その脳自体も休眠状態だから無理もない。でも彼女は違った。僕はその時は凄い偶然だと思ってたけれど、彼女のMRIの結果とこの二週間の様子を見ていたら、とても偶然って言葉じゃ説明できなかった。そう思わないか？」

ベリーは何も言わず、無言で返す。そしてアルは、彼にしては珍しい、どこか呆れたような笑みを浮かべて続ける。

「正直彼女はとても賢い。各界で神童とか言われていた僕と比べると、まさに僕なんかミジンコさ。……あの人工知能のリーグナントを凌ぐかもしれないレベルだよ。これに気付かないで彼女を戦闘要員に回していたかつての軍隊のお偉いさんの事を考えると、ほんと馬鹿だと思うよ。腹を抱えて笑っちゃう。もし彼女をブレインとして扱っていたら、数年は早く終戦出来たんじゃないかな。まあ、そんな彼女を見ていたらちよつと思いついたんだ」

そこで彼は一息区切って言う。

「ドーターに繋いでみようかと思う」

翌日。十人程度の人の前にルナはスーツ姿で立っていた。その彼女の目の前の数人も、ルナと同じようにスーツを着ており、まるで檻の外から動物を眺めているかのような、物珍しさを含んだ視線でルナを見つめている。そしてルナの隣にいる、若干小太りの中年が、ほんのりと冷や汗を輝かせながら数人へと言う。

「……えーっ、急な話なんですが、本日からルナ君がこの部署で働くことになりました。私も今日聞かされてとても驚きましたが、この部署は今人員が足りてないので、内心ほつとしています」

ルナ君の前の職業は個人経営の法律事務所の事務員だそうです。うちの仕事とは全く内容が違っていたそうなので、彼女が困っていたら手を貸してあげて下さい」

彼がそう言い終わると、ルナは深々と頭を下げた。

アルは自室のデスクに着き、コンピュータの画面を見ながらニヤニヤと笑っていた。丁度そこにベリーがノックもなしに入室する。アルを見て、ベリーは面を食らった。

「……仕事中にヘンなもん観てんじゃねえよ……」

そこでアルはベリーに気付いたようで、ほっこりとした笑顔で「やあ」と彼に手を挙げて挨拶をした。

「違う違う違う。ルナの仕事っぷりを見てたんだ。見てよこれ」
「そういえば働き始めてからもう一週間か。どれどれ」

ベリーはデスクを回り込み、アルの傍らで画面を見る。アルは画面を指でタッチして操作した。

「初日は施設見学、仕事の内容の説明を受けただけ。二日目は真面目に取り組んでたんだけど、土日を挟んでの三日目を見てくれないか」

画面にはとある動画ファイルが展開されており、その動画はル

ナを中心に、職場がある程度見渡せるように、彼女の頭上から俯瞰して撮影されていた。

「これ、どうやって撮ったんだ？」

「モスキートドローンさ」

その一言に、「ん」と僅かにベリーが反応する。

「いつの間に偵察用ドローンなんて作ったんだ」

『あれ』を使ってね」

ベリーの顔は怪訝なものに変わる。

「必要以上に『あれ』に電源を入れるな。いつか手を噛まれるぞ」

アルは彼の座っているリクライニングシートの背に全体重を乗せて、穏やかな顔の横目でベリーを見て言う。

「心配するな。君は、いや、僕たちは過敏になりすぎているんだ。

人類はプリীগナントの生み出した技術にもっと触れるべきだ。

とりわけ僕たちはね。このドローン技術や原子転換術、ロンズデ

ーライト精製術等々、プリীগナントを忌避するあまり放棄され

たこれらの技術を人類の躍進に使わないのは本当に愚かだと思っ

よ。あと、フラグを立てている訳ではないが、きちんと安全装置

がある。もしそれでもエラーが起きるのならば、それは人為的な

ものだよ。つまり僕が君がしかエラーを起こし得ないんだ。君は

そんなことしないだろ？」

ベリーは首を縦に振る。それを見てアルは微笑み、それから画

面の方を指さした。

「さて気を取り直してルナの近状。今、丁度いいところさ」

画面では、ルナがまさに席を起立しようとしている所だった。

彼女はそのまま、オフィスから休憩所へと向かう廊下へと移動する。ドローンも彼女に追尾しているようで、視点が移動していき、

常に彼女の背部を捉えていた。そして彼女が廊下にたどり着くと、

その廊下の右壁に向かい、手に収まるほどの小さな何かを両手で張り付けた。その張り付けられた壁を見ても何もそこには見当た

らなかった。次に彼女は左側の壁にも同じように何かを張り付け

る。その後、彼女は他の部署やエレベーターからオフィスへの廊下でも同じように何かを張り付けると、そのままデスクへと戻っ

ていった。壁へとカメラがズームする。するとそこにはセロハン

テープの様な透明な小さな何かが張り付けられていた。

「なんだこれは……」

「スコープを変えよう」

突如、画面全体にスモークがかかったように変わる。すると、その向かい合ったセロハンテープから、何やら糸が張られている様に何かがかかっていた。

「……赤外線センサーか？」

「そう！ その通り！ この前工房を貸してほしいと言われたんだ

けど、まさかこんなものを作るためだったとは思わなかったよ！」

アルは楽しそうに大声を上げる。ベリーは頭上にはてなを浮かべているような表情で見ていた。

「しかし、なんでこんなものを……」

「彼女のデスクの画面を見ればわかるさ」

画面はデスクに座った彼女の背後へ。そこから画面を覗くと、画面上にはいくつもの記号の羅列、プログラミング言語が並んでいた。

「これを見られないよう監視のための赤外線センサーか……で、何を作ってるんだ？」

「聞いて驚け！ AIさー！」

ぎよっとベリーの顔が変わった。ふふんとアルは鼻を鳴らして続ける。

「彼女は庶務の仕事を全てAIに押し付けて、余った時間をこのAIのプログラミングの調整に費やしているのさ！」

「セッコ!! セコすぎんだろ!!」

まるで自分の事のようにアルは自慢げに言う。

「彼女の知能の高さは分かっただろ？ 僕は何も教えていないが、素人の状態からたった数日でここまで出来るようになったのさ。すぐくね？ あと、楽をしたいというのは知能ある生命体に必要な欲求だから、とても人間らしくていいじゃないか！ いよいよ彼女は人間らしさを取り戻したって事さ！」

ベリーは頭を搔いて呆れるように溜息をついた。

「……まあ、確かにそういう意味ではいいことかも知れんが……」
そこで少し真面目そうにベリーはアルに言う。

「このままじゃ何事もなく社会復帰しちまうぞ？ いいのか？」

それを聞いて、アルはいつものように鼻を鳴らす。

「大丈夫。彼女は分かってくれる。彼女は実は正義感に溢れすぎている性格をしているからね」

ルナはデスクに向かい、ひたすらタイピングをしていた。彼女が働き始めて今日で二週間を迎える。今日もたった二時間で全ての業務を終わらせ、ひたすらプログラミングに励んでいる。

「やはり、完全さは逆にあざといですね。超低確率で何かしらのミスをするようにしましょう。だいたい半年に一回程度、偏らないようにバランスを考えつつ、尚且つランダムで」

などど心の中でつぶやきながら、そのように設計していく。そして、ふと時計を見た。時刻は昼食時で、そういえば空腹感もあり、更には程よい疲労感もあった。彼女は立ち上がり、財布を取り出すためにロッカールームへと向かう。

ロッカールームに辿り着いた。いくつものロッカーが並んでおり、それぞれにパスワードを入力するタイプのキーロックになっている。

彼女が自分のロッカーの前に立ち、取っ手付近のコンソールに入社時に与えられたパスワードを入力しようとしたその時、その部屋に一人の女性が入って来た。

丁度、ルナの背中にその女性がいることになるので、一抹の不快感を感じて入力を躊躇した。勿論、パスワードが悪用されることは滅多にないと思うのだが、なんとなく自分のロッカーの中を一瞬でも覗かれてしまう可能性があるのを感じると、何だが嫌な気持ちになり、その女性の動向を伺った。

女性はその女性のロッカーの前、ルナから見えて五つほど左のロッカーに立ち、パスワードを入力していく。ほっと一息ついたルナは自分のロッカーにパスワードを入れて、ロッカーを開けた。自分の鞆の中の財布を取り出し、ロッカーを閉じる。

さていよいよ食堂に向かうとしたとき、ふと女性の異変に彼女は気付いた。ずっとそのロッカーの前に立ち、呆然とパスワード入力のコソソールを見つめていた。不思議に思ったルナは声をかける。

「あの……どうしましたか……？」

その女性はビクリと肩を揺らしルナを見た後、「ああ……」と声

を漏らしてコンソールを見る。

「ええと、パスワードを入力しても認証してくれないんです……」

ルナが近寄り、じっとそのコンソールを見る。

「このロッカーで合っていますか？」

「はっ、はい……間違いないです……」

「ちよつとパスワードを入力してもらえますか？」

そういうと、そのコンソールに女性は慎重に入力し、エンターキーを押すが、アクセスを拒否されてしまった。何も言わずに女性はまだ一度入力するが、やはり拒否されてしまう。そこでルナは提案した。

「すみません、私に一度教えて貰っていいですか？ 一文字ずつ打っていきますので」

そう言うとき女性は「分かりました……」と言い、ルナに耳打ちするように一文字言い、ルナがそれを入力すると言うのを繰り返す。そしてエンターを押すが、結局は認証しなかった。その女性はそのため息をつき、ルナに言う。

「ちよつと責任者に言ってきました……」

と言い、立ち去ろうとする。

「あ、ちよつと待ってもらえますか」

唐突にルナに呼び止められ、女性は立ち止まり振り返った。見ると、ルナは懐から会社から支給された連絡用コンソールを取り

出す。そのコンソールからケーブルを引き出すと、ロッカーのコンソールのケーブル口に差し込んだ。そして軽快にその端末を操作していく。

「あの……何してるんですか？」

恐る恐る女性ハルナに尋ねた。それに無機質にルナは返す。

「パスワードを入力しても駄目ってことは、システムのエラーだと思っんです。これくらいの装置なら、私でも何とかかなりそうなのでやってみます」

と言い、狼狽する女性をよそに操作を続けていく。そこで、ルナはあることに気が付いた。

「……今朝、このロッカーにクラッキングした形跡があります」

「えっ……」

「貴方、いじっていませんよね？」

「え、ええ……はい……」

「プログラムがめちゃくちゃに書き換えられています。全然関係ない文字がプログラムの中に組み込まれていて、作動しなくなっています。侵入したログも消してない、素人手段な感じがします。嫌な悪戯ですね。今開けます」

すると、ロッカーからカチャンと音が鳴り、コンソールの色が青くなる。

「はい、これで今まで通りに使えます。クラッキングされた事は

管理者に言った方がいいと思います」

「え……あ、ありがとうございます……」

「いえ、気にしないでください。では」

戸惑いつつも礼を述べる彼女をよそに、ルナはロッカールームを出て行っった。

と、そんな時、ロッカールームから短い悲鳴が聞こえた。流石のルナもビクリと反応し、速足交じりでロッカールームに戻り、先程の女性に声をかける。

「どうしました？」

目の前には勿論あの女性がいて、ロッカーの方を凝視しているが、そのロッカーから、白いビニール袋がいくつも転がり出ている。その白い袋からはお菓子などのゴミが透けて見え、それぞれから鼻が曲がりそうな悪臭がする。女性は何も言わずそれらを静観していた。直前にクラッキングされた痕跡、ゴミの山、女性の一連の反応から、ルナは察した。

「あの……」

目の前の女性は突然ぶつきらぼうにそのゴミの山をロッカーからかきだして、ロッカーを閉じた。そしてそのゴミの袋を両手で全て掴み、何も言わずに暴力的な足取りでその場を去ってしまった。その時ルナは彼女の背中を見送ることしかできなかった。

「アルさん。お願いがあります」

「どうしたんだい唐突に。君から話を切り出すなんて珍しいじゃないか」

そこはアルのラボのキッチンルームで、アルとベリーとルナの三人で食卓を囲み、夕食を摂っていた。部屋はホログラムではなく、実物のインテリアを駆使して、カジュアルで落ち着いた感のある内装にされてある。目の前に並ぶ食事はどれもベリーのお手製で、とてもこだわりのあるというのが、ラインナップを見ただけでわかってしまう。

そんな和やかな雰囲気の中、ルナの顔は暗く沈んでいるようにも見える。そんな彼女にアルは明るいいつもの表情を浮かべて話に耳を傾けた。

「アルさんが使っているバグタイプのドローンをしばらくの間でいいのでお借りしたいんです。それと、本日分の映像データもお借りできますか」

それを聞いたベリーはあからさまに気まずそうな顔をしている。だがアルは嬉しそうに返す。

「勿論構わないさ。好きなだけ使うといい。というか、気付いていたんだね。どうしてわかったの？」

「私の頭上にずっといたの。見たら機械仕掛けですし、羽音も普通の他の虫とは全く違ったので」

「……ただの知覚で判別したのか！」

まるで子供のようにきやつきやと笑う彼は、一通り驚き楽しんだ後、穏やかな声のトーンに下げて彼女に言う。

「他にも代機があるし、それもうあげるよ。僕のデスクにあるから取ってくるといい。別に壊してしまってもいいよ。あ、操作ソフトはデスクの隣のキャビネットにディスクがあるからそれも持つていくといい。映像もその中に入ってる」

「ありがとうございます。ごちそうさまでした」

彼女は席を立ち、すたすたと廊下へと向かい姿を消す。それを見計らってベリーが重い口を開いた。

「……あの子、怒るのかと思った。変な汗かいたわ……」

「こんな事でいちいち怒る性格じゃないよ」

余裕そうにそう言うアルに、ベリーはジト目を浴びせた。

「……まあ、お前からしたら、全てが計画通りで気持ちがいいんだらうな……その余裕を分けて欲しいぜ……」

「まあね」

アルは不敵に笑う。ただただじっとルナの消えた方向を彼は見ていた。

翌日、彼女はいつものようにAIに全ての業務を押し付ける。以前よりも効率を上げ、かつ二台目を運用にするようになったので、ものの三十分で少なくとも今日の最低分の業務は終わらせてしまった。

さてと、と彼女は懐からミニディスクを取り出し、それをデスクのコンピュータに挿入する。ものの数分でミニディスク内のソフトがインストールされ、自動的にAIと同期する。

それを確認すると、マカロン程の大きさの灰色のシリコンケースを取り出し、そのふたを開ける。そのシリコンケース内は白色のスポンジの緩衝材が入っており、その上にぽつんと何やら灰色の蚊が横たわっていた。だがよく見ると、何やら材質が刺々しい金属の様なもので、スチールウールのような複雑な光の反射を見せている。

そして彼女がコンピュータで先程のソフトを起動すると、画面の支店はそのドローンの視覚に瞬時に変わった。彼女は画面を難ぐように触ると、そのドローンは羽を羽ばたかせ、上へと浮いていく。彼女は画面に向き直ると、早速操作を始めた。人が背後にいる時はAIの移動操縦に任せつつ、彼女はロツカールームへとそのドローンを移動させ、待機させる。

張り込むこと一時間、昨日の女性が姿を現した。彼女が荷物を一式ロツカーへと詰め込むと、そそくさとロツカールームを出て行った。ドローンはその女性を追従するように移動していく。

そのまま二時間ほど彼女を追従すると、彼女はトイレへと入っていく。そこで彼女が色直しをしていると、三人の女性が入って来た。その三人のうちの一人がその女性に話しかける。そこでルナは話しかけた女性の態度の悪さから雲行きの悪さを感じ、そこで音声の録音を行った。

聞こえてくるのは耳を塞ぎたくなるような罵詈雑言の数々。そして画面に映るのは怯える女性と、その様子を楽しむ三人。数分後、三人組は女性を残してトイレから去っていく。一部始終を捉えたドローンは、三人のうち、一番発言の多かったリーダー格の背中を捉え、追従していく。ルナはそのドローンを通して、終業までずっと彼女を観察し続けた。

女性は憔悴していた。彼女が働き始めてしばらくしてからこの手の嫌がらせは始まったが、最近になって手が込むようになってきて、どこもこれもが重く深い一撃を彼女の心に突き立てていく。それも毎日毎日続くので流石にうんざりしてきた。聞く所による

と、あの三人は最近一層忙しくなり、重役を任されることが増えたという。きつとその際のストレスが自分へと流れ込んでいるのだらうと彼女は推測する。最初のうちは止まない雨はないと、彼女たちがより忙しくなって自分に目が向けられることが無くなるまでの我慢だと思っていたが、最早そういう目的があつて耐えていたということを彼女自身が忘れていた。

トイレに籠っていた彼女は、ふと背後の人の気配に気づいた。その気配はドアを開けて彼女へと近づいてくる。またいつものだと彼女は直感した。何故かあの三人はいかなる時間でも、彼女がトイレに入るのを見計らつて後をつけて入つて来る。それだけの執着心をどうして自分だけに向けてくるのかなどと言う疑問も、今日はどんなことをされるのかと言う恐怖ももうすっかり枯れ、彼女は力なく後ろを振り向いた。

だが、彼女の予想とは裏腹に、そこにいたのはあの三人ではなく、一人の女性だった。そしてその顔には見覚えがある。確か二日前に自分のロッカーへの悪戯を直してくれた人。

「こんにちは」

無機質にその女性は挨拶を自分の方へと向けてきた。

「え……あ、こんにちは……」

まるで豆鉄砲を食らつたような顔で返す。そしてそのまままたどたどしく質問を投げかけた。

「あの……私に何か用ですか……？」

「はい、単刀直入ですがこれを見てください」

目の前の女性はその手に握られていた端末を自分へと突き出した。その端末の画面を見ると、見た事のある人々が映っている。それは動画で、場所は今まさに二人がいるこのトイレだった。その動画には四人の女性があり、一人は壁に背をもたれて、もう三人はそれを取り囲むようにして立っている。視点はまるで監視カメラのようにこのトイレ全体を俯瞰して観られるようになっていく。その女性にとつてその光景は見覚えのあるというものではなかった。何せ、その壁にもたれている女性が彼女自身だったからである。

「これって……」

「私、丁度あの時、その個室の中にいたんです」

彼女、ルナは一番入り口近くの個室に指を差す。

「様子がおかしいと思つて、悪いとは思つたのですが一部始終を録画させてもらいました。この三人には釘は打つてあります。金輪際このようなことは無くなると思います。これ、貴方の好きにしてください」

そう言い、端末からメモリーカードを抜き出すと、その女性に手渡した。女性は呆然とその手の中のメモリーカードを見つめる。
「それでは」

ルナが立ち去ろうとする。そこで女性は「あの!!」と大きな声を出してルナを引き留めた。ルナが振り返ると何とも言えない表情で女性はルナに言う。

「あの、どうしてこんな事を……」

その問いに疑問を抱くようにルナは首を傾げた。

「質問の意図がよく分かりませんが、私、何かまずい事でも？」

「いえ！そうではないんです！」

慌てて彼女はそれを否定して続ける。

「ただ……わざわざこんな事を私の為にしてくれたんですか？それに、あの人たちに釘を刺したって言いましたよね……？それって、あの人たちと話をしたってことですよね……下手をすればあなたが酷い目に遭ったかもしれないのに……」

無機質だったルナの表情が、ほんのりと色を付ける。ルナは一瞬だけその女性とは全く関係のない明後日の方向の天井を見つめると、女性に向き直って言う。

「私が不快に感じただけです。義を見てせざるは勇無きなりって言いますし。それに私も少し前に他の人に助けてもらうことがありましたので、それを思い出すと少し思うところもありまして」
そう伝えると今度こそ去ろうと「では」と言って背を向けて去っていった。

Scene:5

「ルナさんルナさん」

そうルナの背中から誰かが呼びかけた。設置した赤外線センサーに誰かが通った反応があったので、ルナはプログラムを画面上から下げて、あたかも通常業務を行っているように見せかけた。彼女が振り返ると、そこにはあの女性がいた。以前と比べてその女性の表情は朗らかで、重々しい雰囲気はすっかりなくなっていた。その女性に向かってルナは、

「モイラさん、おはようございます」

ルナの一言に彼女、モイラは苦笑いを浮かべる。

「おはようって……もう昼ですよ……」

「もうそんな時間ですか。仕事に集中していたので全く気付きませんでした」

「ルナさんはよく働きますね……さあ、ご飯食べに行きましょうよ！今日はちょっと会社の外に行きませんか？」

そう言ってモイラはルナの手を引いて椅子から立たせると、エレベーターの方へと引つ張っていく。

「ルナがあの子と仲良くなつて、もう三週間は経つけど、最近はどうな感じだい？」

夕食の時、アルはルナにそう聞いた。ルナはそれにキョトンとした様子で言う。

「ドローンでの映像通りです」

「まあ確かにそれを見れば一発なんだけどね。最近はドローン飛ばしているけど、僕は映像は見てないからなあ。すっかり仕事っぷりも習慣的になっているし、これ以上心配する必要もないかと思っているしね」

「では、どうやって操縦を……？」

彼女は真剣そうに聞くと、アルはいつも通り笑顔で返す。

「君の仕事場で使っているAIを僕なりに再現したのさ。それで自動操縦しているんだよ。で、最近はどうな感じかな？」

ルナは丁度そこで食事を食べ終え、ややうつむき気味に言う。

「……毎日昼食と一緒に摂っています。その後は雑談をします」

彼女がそう言うのと、アルは嬉しそうに頷きながら言う。

「そうかそうか。まあ会社の中だとそんな感じか。休日とかには遊びに行く約束とかしないのかい？ 休日はいつも僕らと過ごしているけど……」

彼女はまたキョトンとした表情になった。

「え？ どうして遊びに行く必要があるんですか？」

今度は逆にアルが少し驚いたような表情をする。

「仲のいい友人とは休日でも遊ぶものだよ。普段会社では話せない事を話したり、勤労から解放されて羽を一緒に休めたりするのはとてもいい気分転換になるぞ」

「……ということは、アルさんには友人がいらないんですか？」

ビクリとアルの肩が跳ねる。

「ん……？ どうしてそういうことになったのかな……？」

彼女は無情にも、色のない顔で淡々という。

「アルさんは毎日ラボで研究してらっしゃいますので。遊びに行ったりはしないのですか？」

「んーとな……何というかな……そうそう！」

アルはベリーを指さして言う。

「毎日毎日僕は親友と楽しくやってるさ！ 毎日の研究が楽しくて仕方ない！ ベリーもそうだろう？」

「ノーコメン——」

「ほら見ろ！ ベリーだって毎日楽しくて月まで吹っ飛ぶくらい気が狂いそうだって言っているじゃないか！ だからルナ、その友達を誘って遊びに行くといい！ 社会勉強にもなるから、社会復帰の養分になるかもね！ 友達もきつと君と遊びたがっているに違

いないさ！ ささ！ 明日は土曜だが夜更かしは肌に悪いぞ！ 歯を磨いて眠るといい！」

アルの促しに何の疑問も持たない様子で、席を立って「ごちそうさまでした。おやすみなさい」と言って廊下へと向かっていった。そしてベリーが言う。

「素直に言えばいいじゃねえか。色んな学会で挑発めいた発問しまくってたら浮いてしまつて友達が一人も——」

「それ以上言つたらホントに月に左遷するよ」

「……了解した」

ルナは一人、真つ暗な自室のデスクで昨日の夕食の話の内容を思い返していた。頭の中でグルグルと「友人」「遊ぶ」という言葉が駆け巡っており、呆けている。生まれて自我を持った時には既に銃を扱う事ばかりしていた彼女にとって、友人と言うのはイマイチ想像がつかないものである。共に喋ったり食事をした仲間ならば、確かに友人と言う定義には当てはまっている。ならば、社会勉強の一環として、やってみてはどうか。悶々としながら、彼女はベッドへと倒れ込む。そのまま溶けるように睡魔に飲まれていった。

早朝七時。ルナは眠い目をこすって目を覚ました。彼女は休日
は八時までゆっくり眠るのだが、何やら外が騒がしい。アルとル
ナの住むこのラボは、ベッドタウンに建てられている。団地から
少し離れた広い大きな土地を一つ借りて、そこに洋館のような
佇まいの屋敷を建てているので、目立ちはするが人通りは限りな
く少ない。つまり、故意的にそこに寄ろうとしなければ、人が集
まることはあり得ない。つまり、騒々しいというその現象が、普
通ならあり得ない。

彼女はその騒々しさに招かれ、窓際へと寄り、カーテンを少し
開けた。彼女のいる三階から見下ろすと、そこには大量の人、人、
人。ざっと見て、年齢層は二十代から様々で男女の混ざりがある。
そしてやたらと統一されていることが一つあった。それは彼らが
カメラを持っていたり、マイクを持っていたり、要するに報道関
係者だということである。その群衆は屋敷の庭までには踏み込ま
ず、その柵の外で、まるでパレードやイベントを待つかのように
何かを待っている。彼らは互いに話をしていたり、道具の整備を
行っていたりする。

そして、そのうちの一人がルナに気が付き、ルナへと指を差し
た。すると、群衆はわあっとわき上がり、まるでカメラを銃のよ
うに彼女に向け、撮影に勤しもうとしている。その記者たちの奇

異の視線に、小さな悲鳴を上げて後ずさりする。視界からその群
衆がその後ずさりで消えるが、彼女はそのまま後ずさりを続け、
ベッドに尻餅をつくように座った。何が起きているのか分からず、
ほんのわずかに呆然と窓を見つめる。

そこで、彼女の部屋のドアが開け放たれた。ビクッと彼女が振
り返って見ると、そこにはベリーが息を切らして立っていた。彼
は声をかける前に、少し開いているカーテンと彼女の様子から察
し、そこから彼はルナに言う。

「来てくれ。悪いが朝食はお預けだ」

二人がリビングに着くとアルは客間を兼ねたリビングのソファ
に腰をどっしりと乗せていた。彼の顔はいつもの陽気なものでは
なく、何か真剣に物事を考えるような、複雑そうな表情である。

「二人とも、よく来てくれた」

「あの……何ですか、あの人たちは……」

いつになく重々しい雰囲気の中、アルはソファにその背を大き
くゆだねて天井を仰ぎ見る。

「君がアームロイドということが漏れた」

それをポツリと言って、彼は大きく息を吸う。それを大きく鼻
から憂鬱と共に噴き出すと、彼は続ける。

「大方、君を引き取る際に手続きをした公務員共のうちの誰かが

漏らしたんだろう。どうやら口止め料と言うものを理解できなかったらしいな。口止め料を積まれた以上、例えそれを超える金額が支払われたとしても口を割るべきではないと言うのに。もし僕じゃなくギャング相手だったなら、大自然の肥やしなっているかもしれないというのによくやるよね。……いや、口止め料は彼らの年取程だったから、それを超えるというのは口を割らせる料金にしては高すぎる……好奇心か何かに負けたんだろうね」

「……まずい事になったな」

二人はあからさまに落胆する。そこでルナは二人に問いかける。
「……何がどう問題になるんですか？」

アルはルナの顔を見た。彼女の顔も同様に影が差している。それを見て彼は彼女が殆ど状況を受け入れているが、あえてその整理のために二人に質問を投げかけたのを察した。

「……君が目覚めた後に、僕が色々なことを教えた内に、アームロイド更生に關しての話があったのを覚えているかい？」

「……はい」

「今までの事例は全て失敗に終わったのさ。失敗事例の彼らへの処置は通常の精神異常者や薬物中毒者などのものと同じだったんだけど、それが間違いだっただ。今までの治療法はどれも確かに精神異常と薬物中毒には適切だったんだけど、アームロイドにはどうやら適切ではなかったみたいなんだ。そんな中、君と言う

成功例が出来上がった。そこに飛びつかないマスコミはいないさ」
そこで一息ついて続ける。

「そこまで聞くと、確かに美談さ。だが、君の更生プログラムはまだゴールテープを切っていない。監査委員会と僕とが決めた目標は、精神異常や異常行動が見られないかつ、普通の従業員と同じような扱いの上での二カ月間の就労実績だったのさ。現時点で君が働き始めて五週間経った。そこでこの顛末さ。君がアームロイドという事実は、今後職場にも色々と響いてくるだろう。それにより、普通の従業員と同じ扱いを受けるという条件は満たされることは出来ない。今後の更生条件変更についての監査委員会との話で、恐らく君は更なる長い時間の就労を課せられる事になるだろう」

「……その何が問題ですか。私が延長された分だけ長く働けばいいだけの話です」

ルナが挟み込んだその言葉に、アルがどこか悲しそうに返す。
「確かにその通り。だが僕は君にこうも教えた。アームロイド更生の中での具体的な失敗例。精神異常と異常行動が多く見られ、それらが高じて事件を起こした。器物破損や殺人、そして大量殺人。どれもこれも当時の人々にとってはショッキングなものだった。問題はここなんだよ。アームロイドに対する偏見、怨恨、恐怖。これらはきっと君を、いや僕たちを縛る。更に言うところアーム

ロイドの取り扱いに関する法律はまだ出来ていない。それはアームロイド更生が成功していなかったからさ。逆に言えば、アームロイドを守ってくれる法律が存在しない。致命的で決定的だ。…僕が口で語るより、今日からの展開を君自身が見ることによって、人間の本質と言うものを見極めるといい」

そこから彼女の生活は一変した。その日のうちに会社から「もう来なくていい」という通達を受け、外出することは一切なくなつた。

早朝から深夜と言うレベルではなく、二十四時間体制で報道関係者は屋敷の前で待機し、閉ざされたカーテンに穴が開くほどの注意を向け続けている。時たま、カーテンが揺れることがあればそれだけで群衆から声が上がリ、シャッター音が鳴り響く。周りに他の住宅がないことをいいことに、野原にテントまで張っている者も珍しくない。

そんな訳で、彼女はおろか、アルやベリーも外に出ることが出来なくなっていた。ここ数日は屋敷を出入りするのはルナたちよりも、日用品を配達する訪問サービスの配達員の方が多くなっている。そして漏れなく、配達をし終えて出てきた配達員は、記者たちの質問の嵐に遭遇するというのがテンプレートになっていた。テレビのニュース番組は、すっかりルナたちの事でもちきりにな

り、今自分たちが中でいるのにも関わらず、中継映像でその屋敷の外装を見ることが出来るという事も毎日繰り返される。関連ニュースも、プリーグナント大戦を筆頭に、アームロイドに関わることなら何でも流れるようになっていた。

そして一か月が過ぎた頃、記者も数はそこそこに減っていったが、今度はアルの言つたようにアームロイドを快く思っていない団体がその屋敷の周りを群がるようになった。それと同期するうちに、警察や逆に保護団体までその周りに集まるようになり、周囲は混沌とした騒然さに包まれることになった。中継で見る屋敷の外装も酷くなっていた。手入れがされていた庭園は、放置された植物園のように雑草や虫で雑多になり、建物を取り囲む塀にはスプレー缶で暴言が際限なく描かれている。

警察がいるので暴力的なことは殆どなかったが、一度だけ火炎瓶が投げ込まれたことがあった。自動鎮火システムによる放水と消火剤散布により、大事には至ることはなかったが、屋敷の壁は今も黒いすが目立ち、周囲の地面は雑草が燃えた後なども見られる。また、屋敷の壁面にはカラーボールの後など、以前の様な荘厳な雰囲気は一切なくなっていた。

そんな屋敷の中、アルはリビングでテレビをじっと観ていた。いつもならば自室にこもって研究に没頭するタイプなのだが、彼はペットボトルのジュース片手に、猫のように気ままにソファで

横になっている。瞳にはテレビからの光が反射しており、口は中途半端にあんぐりと開けている。見れば見るほど、空気が抜けて伸びきった風船のように見える。見かねたベリーが言う。

「……今日はいつになく脱力していな」

「うーん……外に出られないじゃん？ 仕事はオールキャンセルされるじゃん？ 実験する為の物資も日用品デリバリーの項目もないじゃん？ なーんもやることない。一日中テレビ観るしかない。あ、ベリー母さん、晩御飯なに？」

「誰がお母さんだ。お前のは抜きよ。ご飯出来たからルナを呼んでおいで。ていうか、あいつ今日は朝飯の時も昼飯の時も降りてこなかっただろ？……自殺とかしてねえよな？」

アルは苦笑いする。

「いや、それはないよ。人工脊髄からのバイタルサインは今でも健在さ。バイタルサイン的にも彼女はずっと起きている」

「でもAI発明したんだろ？ それで誤魔化すことも出来るんじゃないか？」

心配そうに言うベリーに「無理無理」と苦い笑いを浮かべたま言った。

「まず機材がない。あったとしても一瞬のバイタルサインのブレもなくそれを行うのは流石に無理さ。んで、どうやってレントゲンもないのどうやって人工脊髄にプラグ差し込むのさ。……は

あーあ……………」

彼はうなだれながら溜息をしてソファにより一層沈んだ。

「流石のお前もここまで家を汚されるとへこむか」

「あ、うん、まあね。物を壊されてへこむとかじゃなくてさ、僕はアニメズムとか信じているタチだから、家に申し訳ないな」と。まあそれでちよつと憂鬱みたいなの？」

そこでまた深くため息が漏れ出す。今度はふと天井を見て言う。

「まあ、でもルナはもつとへこんでいると思うよ。彼女の事だから自分のせいでナントカカントカーとか考えてそうだ」

そこで「よししょ」とソファから飛び上がり、大きく背伸びをして廊下へと踏み出す。

「さて、呼びに行ってくるよ」

彼はゆっくりと階段を上がり、ある部屋のドアの前で止まる。何気なく胸の辺りまで上げた右手で軽くドアを小突いた。

「ルナー。ご飯だよー」

彼は彼女が出てくるのを待つが、一向に何かがそこから出てくる気配がない。ちらりと彼はポケットの中の端末のバイタルサインを見る。バイタルサインは通常時よりも少し激しく動いているのが分かる。彼は思わず鼻から笑いの息を漏らした。

「入るよー」

ドアを開けたその先は照明が機能しておらず、しんみりとした静かな空間が広がっている。部屋はとても整理されており、床には物が一つも落ちておらず、家具やデスクの上のもの全てがバランスよく置かれており、まるでモデルハウスのように整っている。見回して彼女を探すが、ものの一秒でベッドの上が膨らんでいるのに気付く。ベッドの上の掛布団の枕元から真っ白い毛の塊が覗いている。そんなうつぶせの彼女へ彼は少し笑いながら近付いた。

「寝ているフリは止めるんだ。荒い息が布団の隙間から洩れているよ。それに君はいつも横になって寝るだろ」

するともぞりと大きく動く。狸寝入りしていた彼女は膝を丸めたかと思うと、体を起こして足を三角にして前に出し、膝におでこを付けた。

「……何で私の寝る向きを知っているんですか？」

「寝起きの君の口周りを見ると左頬によだれの後があるのさ。そして左頬に枕の生地痕。左側面に目立つ寝癖とかね」

彼女は何も言わず、体も動かさない。アルは言う。

「ご飯に行くよ。お腹すいたろ」

「……お腹空いてないです」

彼はまたチラリと端末の画面を見て「ふむ」と呟く。

「血中糖度が著しく少ないね。これでお腹が空いてないのは詭弁じゃないかな」

彼女は未だに沈黙を貫いている。

「気にしているのか」

彼女は無言で返す。そのままアルも黙ってその場で彼女をじつと見つめている。しばらく沈黙が流れた後、彼女は開口した。

『私たち』は嫌われているんですね」

「まあね」

彼はフォローもせずに即答する。

「前も言った通り、間違ったセラピーを受けたアームロイドたちの事件は二十年近く経った今でさえ記憶にも記録にも根強く残っている。勿論、君たちは悪くないさ。彼らは憎しむ相手を間違えていることに気付いていない。気にする必要はないさ」

「でも、私のせいでお二人にご迷惑を……」

アルは彼女の頭に手を乗せる。

「いや、気にしなくていい。悪いのは君じゃないだろ」

そこで彼は区切る。

「気にするべきなのは君自身の気持ちさ。世間からは嫌われ、外に出ることも出来ない。そんな生活が続けていい気分じゃないだろ？ 君は、どうしたい？ 正直に言ってみなよ」

「……別に何も」

「何もないならこんな痩せ我慢しないだろ。ほらほら、言ってみなよ」

頭をぽんぽんと頭を叩いた。

「……消えたいです」

「……それが本音かい？」

彼女は静かに頷いた。

「どうして消えたいんだい？」

「……『私たち』はきつと人間とは分かり合えないからです」

「そうか」

頭をぽんぽんと叩いていた手で、こんどは頭を優しくなでる。

その手によって彼女の頭も一緒に揺れる。その場には紙のこすれる音だけが聞こえていた。そして唐突にアルは言う。

「よし、それじゃあ二人で消えるか」

うつむいていた彼女の頭は跳ね上がった。そしてそのまま顔をアルに向ける。アルはとても暖かく優しく笑っていた。

「部屋に籠ってばっかももう疲れたしな。君がYESと言えばすぐにでも支度をしよう。どうする？」

動揺した彼女は声を震わせて言う。

「あの……どういう意味ですか？」

「僕が聞きたいのはYESかNOだよ」

彼の優しい笑みに彼女は少しの恐怖を覚えた。静かに彼女は思

いめぐらせる。この三カ月ちよつとの生活の記憶を振り返る。モ

イラの顔を最後に浮かべて、彼女は決意した。

「……私と消えてください」

アルは静かに頷いた。

Scene 6

最初に異変に気付いたのはとある記者だった。屋敷の前で張り込みを続けて一か月と少し経った頃、彼はいつものようにじつと屋敷の方へとカメラを向ける。どの部屋もカーテンで閉め切られているので記者にとっては何も面白みのない日々が続いている。以前から出入りするの日用品デリバリーの配達員のみなので、アームロイドらの姿を見られるのは配達員くらいしかない。痺れを切らした彼は、ふとあることを思いついた。

「そうだ、配達員に隠しカメラを持たせよう。ほんの少しでも姿を納めないと埒が明かねえ」

彼は懷からメモを取り出した。彼は常日頃から屋敷の反応をメモ帳でメモしており、異変があるとさっとメモをとる習慣をつけている。直接的な反応は、初日に三階の窓のカーテンからアームロイドと思われる女性が顔を覗かせたきりではあるが、カラーボールや火炎瓶が投げ込まれたことなどもそこには記されている。そこで宅配便が来る周期を探り、次はいつ来るかを調べようとした。

そこで初めて気が付いた。三日に一回は配達しに来ていた配達員だが、ここ一週間は来ていない。ということは、この屋敷はもうもぬけの殻ではないのか？ と考えたが、その考えをすぐに払拭

する。彼を含めた記者やデモ団体と野次馬の目をかいくぐって屋敷の外に出るのは流石に不可能である。ということを考えて、日用品をデリバリーしなくなったのは、食糧の貯えがあるからだろうかと考えたが、初日から一週間はデリバリーもなかったことから、その一週間で蓄えは無くなっていた筈だ。もしくはまだ前回のデリバリー残りがあるのだろうかと思ったが、思い出す限りでは配達員の持つ箱はそんなに大きなサイズではなかったはずだ。以上の事を省いて、デリバリーをしなくなった、いや必要がなくなったと言うと、可能性としては……、と一番棟触りの悪いケースが頭をよぎった。

記者は周辺にいる警察の内の一人に声をかけた。

「あの、ちょっといいですか？」

「はい？」

記者はばつの悪そうな顔で言う。

「マクシーさんは、三日に一回は日用品デリバリー頼んでいるんですけど、ここ一週間は来てないんですよ。……ということはもしかすると……心中とかしてるんじゃないですかね？」

そこでその警官ははっと気付いた。そして血相を変えてどこかへ走って行く。

一報を受けてから一時間後、屋敷の前には大勢の武装した警官が集まる。既に電話をアルの家にかけたのだが応答はなく、家の

前でメガホンを使い出てくるよう指示したり、電話に出るよう促しても反応がない。これはいよいよ死んでいるかもしれないと、デモ隊と記者を押し退けて陣を取った。彼らの顔色と武装と人数からして、安全確認というよりも突入して鎮圧するような雰囲気である。それも武装に関しては、警官の中には宇宙服のような重武装の警官もあり、その手にあるのは殺傷用バレルとゴムバレル、アンダーバレルに閃光・催涙スモークの非殺傷グレネードを備えたマシンガン握られていたり、各警官も防弾スーツと殺傷バレルと射出スタンバレットの切り替えがついたハンドマグナムといった、本来の目的とはかけ離れた性能の銃を持つている。それだけアームロイドを警戒しているということで、その緊張も静けさとなつてその場に表れていた。

そして遂に、一人の警官が屋敷の柵を押し退けて庭へと侵入する。それにつられてまず十一人の警官が後に続き、慎重に庭を進んでいく。その全員が玄関へたどり着くと、半分がそこで屋敷の裏手へと回る。ドアにはドアノブがなく、代わりにカードキーを差し込む穴がそこにあった。ドアの荘厳な装飾は実体はなく、スライドシャッタードアの上にホログラムを重ねたものだった。警官は屋敷の裏手に別れた部隊が回り込んだのと、庭に新たに後続隊の十二人が待機したのを確認すると、そのカードキー穴にクラッキングカードキーを押し込んだ。すると、ゆっくりとドアがス

ライドしていく。雪崩のように彼らは中に入り、彼らは分散して各部屋をしらみ潰しに巡っていく。それぞれの警官は銃を携えて各部屋のドアを開け放ち、クローゼットの中やベッドの下まで隈無く確認する。その部屋に誰も居ないのを確認すると「クリア」と声をあげてまた次や部屋へと探りをいれていく。

ものの十分でその広い屋敷の一通りを彼らは確認したが、人の影が一つもない。お互いに報告し合うために彼らは一度、エントランスに集合する。二人は裏口に待機し、残り十人はエントランスに集合する。彼らのリーダーはその一人が一人ずつ目配せしていき、目が合うとそれぞれが首を横に振る。全員が横に首を振つたのを確認すると、リーダーは通信を開いた。

「誰かサーモソナーを頼む」

手持ちの端末はその屋敷の立体地図が模式的に映す。彼ら十人と裏口の二人と思われる熱光源が地図上に映されているが、そこに三つの波が流れる。本来なら隠れている者の熱源が画面に表示される筈だが、そのような反応は見られなかった。

「荷重センサー反応あり。アル、聞こえてるか。奴ら家に入ってきたぞ」

ベリーは暗い部屋で椅子に座しており、目の前に光るホログラムディスプレイを眺めながら、デスクの上のスタンドマイクにそう言った。そしてデスクのスピーカーから返事が来る。

『おー、ちよつと遅かったねえ。もつと早めに来るのかと思ったけど。まあこつちにとつちや好都合なんだけだね』

「この調子だと地下に気付くのはまだまだ先だな。しばらくは安全っぽいな。脱出する時間もありそうだ。そっちは今どんな感じだ？」

『いい感じさ。ちゃんと待機していたカーゴと合流できたよ。それに「ドーター」はルナによく馴染むようだ。そっちこそどんな感じだい？』

ベリーは落ち着いた笑みを浮かべて周りを見た。そこには数人の人影があり、みなベリーと同じようにディスプレイの前に座し、各々が作業を行っている。年齢層や性別はバラバラだが、全員が目の前のディスプレイに真剣そのものである。

「いい感じだ。コイツらはいいい仕事をしてくれる。すっかり調整も終わっちまったわ。いつでも作戦に取り掛かれるぞ」

『そりゃいい！で、いつ始めようか？』

ベリーは口角を上げながら言う。

「いつでもいいぞ。だが一つ言わせてもらおうぞ。俺はさっさと終わらせて俺の家に帰って寝てえ」

スピーカー越しに鼻で笑ったような声が聞こえる。

『よし、じゃあ今すぐ始めようか！ルナ？準備はいいかい？』

『いつでもいいけます』

『それじゃあ頼むよ』

ベリーのいる場所と同じく暗い空間。そこは人が六人入れば満タンになる程の小さな空間で、壁から天井まで様々なものが映し出されているモニターが敷き詰められている。その部屋の中央部に人が入りきれ程の大きな酸素カプセルのようなものがあり、そこに誰かが座っている。頭の中から上が覆い尽くされる白のヘルメットを被り、全身には無数の電極シールが取り付けられ、そこからその人物の周りに置いてあるコンソールへとコードが伸びている。その姿はさながら、巨大なシナプスのようだった。無数にある画面のうちの一つの中に、一つ何も移っていなかった画面が急に光を帯びる。そこには大きな文字で『DAUGHTER』とだけ書かれていた。

その人物のいる後ろの壁が唐突にシャッターのように開いた。

そこにはアルの姿があり、彼は愉快そうにその部屋に入ってきて、何も言わず真ん中にいる人物の手をとって言う。

「やあルナ、調子はどうだい？」

その人物、ルナはピクリと反応して言う。

「良好です。そろそろ始まると思います」

そこで彼は丁度二人の正面のいくつもある画面を見る。

「よし、じゃあ良く観ておこう。僕たちの楽園の貴重なメイキング映像だ」

一つの画面は、スカイダイビングでも始めるような高さの視点から捉えた、とある広大な砂漠を映している。その砂漠にはオアシスのような湖は一切ない代わりに建物郡がちらほら目立つが、どれもこれも朽ちかけていて、とても人が住んでいる様子は見られない。そんな所には勿論人がわざわざ足を踏み入れるはずもなく、ただただ自然があるのままだにそこに居座っている。

そしてカメラは一つの黒点を空中に見つける。一つのドローンがそこに飛んでおり、プロペラを回して滞空していた。すると突如、そのドローンは爆発を起し、四散して地面へと落ちていく。カメラは残骸を追うようにして、再び地面の方を映した。残骸は下へ下へと落ち、やがて確認できなくなるほど小さく見えるようになってしまった。

異変はそこからだった。その砂漠が『割れた』。砂漠は円形にだんだんと割れていき、まるでクッキーの生地を型で切り取ったようになった。そのまま、周りの地面とはくっきりと分かれたまま、

その大きな塊は空へ空へ浮かんでいく。

他の画面の状況もそんな感じだった。砂漠に限らず、放棄された人工森林帯、枯れた湖、汚染され放棄された地域、そしてアームロイド保護施設。それらが先程の砂漠のように、空へ空へと飛んでいく。更にそれらの画面は細分され、映し出される映像は優に百を超えた。

やがてそれらは見た目上ゆっくり、だが実際には猛スピードで上昇し、大気圏を抜ける。カメラが切り替わった。宇宙空間から光景を見渡せるように画面が映る。大気圏を抜けたその塊の一つ一つにそれを包むような膜が見られ、塊は互いに近づき合う。膜が触れ合うと、細胞分裂の映像を逆再生させたように、接地面の板が取れそれぞれが一つの急に合体し、集まった大陸の塊は、互いに中心から外へ向き、パズルのピースのように綺麗にはまっていく。

離れて見れば、それはもう月だった。小さなその球体は、やがて地球の軌道上を離れ、どこかへと飛んでいく。

「ルナ。おめでとう。成功したよ。もう少しドーターの面倒を見てやっていてくれ。後もう少しすれば自動で修正してくれるさ」

そうアルが言うと、ルナの口元がすこしほころぶ。彼女が小さく頷くのを確認すると、アルは部屋を出て行った。出て行った廊

下で、彼は端末を取り出して耳元にあてる。

「もしもし。どうだい成功したよ」

『おう、正直マジで成功するとはな。ミニブラックホールも上手く制御できてみたいだし、オゾン膜も上手くとは、度肝を抜かれたぞ。地震は少なかったが地鳴りが酷かったぞ。めっちゃ怖かった。……っと、ちよつと待ってくれ。電話を代わってくれってさ。ちよつと一言言いたいそうだ』

しばらく間をおいて、その端末から低く、涙ぐみそうに震える声が聞こえる。

『マクシーさん、有難う御座いました……どうか、息子をお願いします……』

「はい、分かりました」

優しい声色で彼は返した。そこからは電話越しにがやがやと騒がしくなる。どうやら、向こうで電話の取り合いになっているらしい。しばらくそれが続いた後、若干騒がしいながらもベリーに戻った。

『聞いての通りだ。みんなお前に感謝してるよ』

「……嬉しい限りさ。僕の方がむしろ感謝してるよ。みんながいなければ、アームロイドの為の楽園は作れなかったさ」

そこで溜息を彼は噴く。

「……本当はルナに友情というものをもっときちんと味合わせた

かったんだけどなあ……」

『まあ結果的には上手くいったじゃねえか』

「それはそうなんだけど……。あ、みんなに伝えておいてくれなにか？ 皆さんの家族はきちんと更生させますってね」

『はいよ。……そろそろ圏外か。こっちは雑音が聞こえる。』

じゃあ次はお前が通信衛星を打ち上げたあとか』

「半年のお別れかな。じゃあ後は打ち合わせどおり上手く監査委員会をごまかしておいてよ」

『おう、じゃあな』

通信が途切れる。彼はまた部屋に戻る。ルナに近寄ると、彼女に取り付けられた電極を一つ一つ取り外し、最後にヘルメットを除けた。そして彼女の手を引いてそこから立ち上がらせる。

「お疲れ様」

彼は微笑んだ。彼女もはにかみながら頷く。

そして、彼女は画面に注目した。うつすらと離れていく地球を見て、彼女の顔から笑みが消えて少し暗くなる。

「でも本当に良かったのですか。こんなことをしてしまって」

彼はニコリと笑って言う。

「構わないさ。僕たちは他の人たちがいらなくなったものを貰っただけだよ。放棄された森や街、鉱山に湖とかね。それに人工知能技術とブリーグナントの生み出した技術、それにアームロイド。

彼らは気付いてないんだよ。要らないものなんてない事にね。それを知らず知らずに続けていく内は、彼らに希望なんてないさ。僕らは違つて真価に気付いている。放棄された地域をテラフォーミングさせる予定だし、人工知能技術からドーターを生み出した。原子転換技術で宇宙の塵の鉄を炭素にだつて変えることが出来る。そしてアームロイド、僕はこの生ある限り彼らを更生させ続ける。それに僕だけじゃない。地球にはベリーたちがいるし、カーゴに乗っているスタッフもいる。それに君もね。みんないるんだ。不可能なんてないさ」

アルは安堵したルナの手をとつて、部屋から出て行く。

「さて行こう！新境地へ！」

End